

「一滴の水からより多くの作物とより多くの収益」を現実のものとするために

佐藤 洋平*

* (独)農業環境技術研究所理事長、ICID 日本委員会委員長

ICID の会議に全日程で参加したのは初めてであった。とりわけ、執行理事会に日本委員会代表として出席したのであるから、これまでとは少し異なる気分での参加であった。第 60 回 ICID 執行理事会および第 5 回アジア地域会議はインド・ニューデリーの会議場ヴィギャン・バワンを会場に 12 月 6 日から 11 日までの 6 日間の日程で開催された。日程後半のアジア地域会議の開会式には来賓としてインド首相 M. シン博士が列席された。

開会の挨拶でシン首相は、20 世紀は限られた石油資源の配分をめぐって対立が生じたが、21 世紀は水の分配をめぐると対立が起こるであろうこと、世界の食料需要が今後 20 年間に 2 倍になることが見込まれ、それはとりもなおさず巨大な水需要となることに言及した。水へのさらなる需要圧は、その多くの人々が農業に依存する人口の増加、工業化、都市化によって一層増大されること、そして、こうした難問の解決はアジアにおいて最も強く求められていると述べ、インドにおける「気候変動に対する国家行動計画」に掲げる八つのミッションの一つである「水のミッション」の趣旨を敷衍した。そこでは、農業技術開発への投資の必要性、開発される技術は最貧農民の手にまで届くものであるべきこと、水問題への農民参加の重要性、女性の意志決定参加に向けた特段の努力の必要性を強調した。「一滴の水からより多くの作物とより多くの収益を」のスローガンを現実のものとするために協働し共に学ぶことの重要性を指摘し、格調のある挨拶を閉じた。

2009 年のこの会議は ICID の設立 60 周年を迎える年に当たっていることもあって、それを慶賀する雰囲気はどことはなしに感じられた。祝賀の行事は取り立てて盛大に行うということもなくいつものようであったが、特別な催しとして ICID 事務局のある建物で一夕の茶会がささやかに行われた。このような格別の慶事が無くとも国際会議には主催者による歓迎のレセプションはつきものである。話し下手の私にはレセプションは苦手な部類に入るものの一つである。しかしよくしたもので、その場に参加するいろいろな国の話し下手の者同士が期せずして良き友人となりネットワークを広げることのできる好機となる。

国際組織の執行などに関わる経験はさほど多くはないが、CIGR、IGBP/IHDP-LUCC、PAWEES など、そうした数少ない私の経験に照らしても、ICID の会議に参加するといつも少なからずの違和感を覚えたり、不案内でなんとなくおぼつかない気持ちになったりする。こうした感情がどこから生じているのかこれまでずっと謎であったが、インドの会議に参加して少しその謎が解けたような気がした。

私がこれまでに関わったいずれの組織もそれぞれにミッションを持っていることでは共通する。ICID のミッションのもとに集まる人々の大多数は、技術を基盤とする実務に従事するエキスパートである。彼らは「体系的に獲得した専門知識に基づいて、現代の社会生活の多くの局面で目標を設定し、問題を分析し、それらのコントロールのために方策を提案」することを通常の任務としている人たちである。たとえば、灌漑排水の技術が適用される場面は地域の気候、文化、社会、政治、経済が異なるので、シン首相が挨拶で述べたように、そうした「地方特有の条件や関心事を考慮する」必要があることを十分に認識した上で、彼らエキスパートは科学・技術の成果を実用世界に伝達することを任務の本旨としている。しかし会議における彼らの発言は、ほとんどが、私たちの日常の活動においてそうであるような、経験される環境世界における特定の状況や事物の因果的説明とは異なる。何でも取り込む一般性を持った抽象的な内容として表現される。108 カ国という多様な国で構成される組織であるのでおのずから会議は多様な人々による集まりとなる。この場合、意見の背景にある人々の経験や環境世界についての情報を持ち合わせていないならば、彼らのそうした意見を真に理解することには困難性が伴う。私の属するあるワーキング・グループの会合での活動目的についての議論で、「貧困」をまずきちんと定義することから始めるべき、「貧困」の軽減と灌漑との関わりを検討する枠組みを明確にした上で議論すべきというような議論の前提に関わる意見に対しても共通の理解に達することはなく、各人各様の意見が網羅的に羅列されて整理されていくという状況はその一例である。

また、「プラスチック・ワード」のあらゆる分野への浸透が意見の真の理解を妨げる。「進歩」「プロセス」「近代化」「発展」「必要性」「コミュニケーション」「インフォメーション」を私達は頻繁に口にするが、これらの語は「プラスチック・ワード」の典型であるという。日常言語における含意のステレオタイプ化、言語のモノカルチャー化が進む現状に警告を発するウヴェ・ペルクゼンによれば、「プラスチック・ワード」は、具体的な文脈で使われたとき、どんなに詳しく規定しても正確に何を言っているのか見定めることができないという特徴を有しているという（ウヴェ・ペルクゼン著、糟谷啓介訳「プラスチック・ワード」、藤原書店、2007年9月）。「アイデンティティ」「関係性」「機能」「構造」「形成」「交換」「資源」「システム」「サービス」「質」「情報」「ファクター」「プランニング」「プロジェクト」「センター」「マネージメント」などもそうした言葉である。きわめて具体の現実を現わす語であるべきだと思うのであるが、「労働」「労働現場」「役割」などもこれに該当するという。こうした「プラスチック・ワード」は、そのいくつかを取り出して並べるだけですでにほとんど文を作っていることが分かる。これらの言葉はあらゆるローカルな特性や現実を無視するので、こうした語が繰り返される会議の場においては、発言者の思いや意図、発言の意味やその背景にある現実などをどこまで理解できているのか不明であり、各人各様に理解することになる。「プラスチック・ワード」の蔓

延によるこうした状況が、近年における「映像化」の重視傾向を助長させているように思われる。「イノベーション」はすでにそうなっているのではないかと思うが、ICID において、「灌漑」「排水」さらには「貧困」までもが「プラスチック・ワード」と化してしまったのではないかとの懸念を抱いた。

近年、多様な意見が集合知となって個々人の能力を凌駕する優れた結果を導くことが数々の研究によって明らかにされるようになった（たとえば、H. ラインゴールド著『スマートモブス』（2002）、J. スロウィツキー著『「みんなの意見」は案外正しい』（2004）、S. ペイジ著『「多様な意見」はなぜ正しいのか』（2007）など）。集団の多様性はそこに認識的な多様性があることを意味している。そこでは、観点の多様性（状況や問題を表現する方法）、解釈の多様性（観点を分類したり分割したりする方法）、ヒューリスティックの多様性（問題に対する解を生み出す方法）、予測モデルの多様性（原因と結果を推測する方法）が機能し、より良い結果が生まれる。しかし他方で、固定観念による見方は多様性の恩恵を損なわせることも研究によって明らかとなっている。108 カ国という多様な国の人々が集う ICID が、意思や見解の明確な表示による相互理解と確かな現実の理解のもとに、多様性の恩恵を享受することによって、「一滴の水からより多くの作物とより多くの収益」を実現するための集合知を形成する場となるよう尽力したい。